

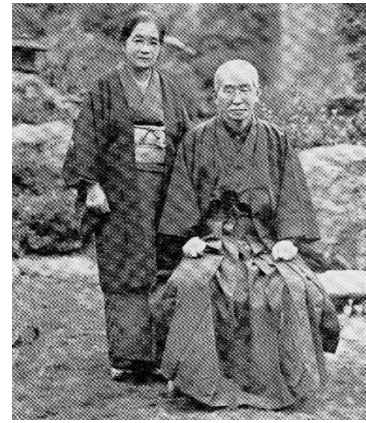
「相馬愛蔵・黒光(本名:良)夫妻の激動の人生をふりかえる」



若き日の愛蔵



少女時代の黒光(本名 良)

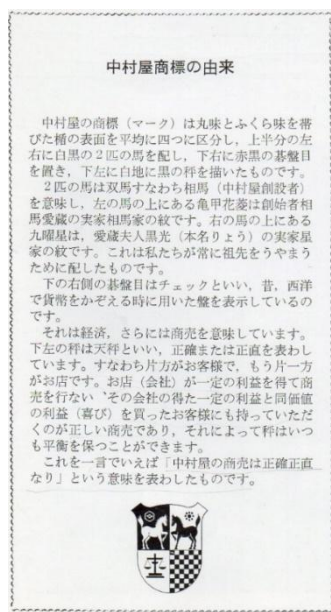


相馬愛蔵・黒光夫妻(昭和 12 年)

(3 枚とも郷土出版社刊『相馬愛蔵・黒光著作集』より。左と右 第 4 巻 中 第 5 巻 所収)

I 新宿中村屋を創業し文化史上に不滅の足跡を残した相馬夫妻を知るためのキーワード

- 1 **国際交流** 相馬夫妻は近代の激動の時代に身を挺して国際交流を実践した。「ロシアの盲詩人エロシェンコのことその他、交遊に国際色濃く、生涯を通じて極めて自然な人間性から国際外交の実を尽くした」(『南安曇郡誌』 第三巻下の人物誌「相馬黒光」)。
- 2 **女性の社会進出** 職業婦人の先駆者としての黒光。夫と二人して地方から上京し、首都東京でパン屋を起業しそれを成功、一流企業へと飛躍的な発展をさせた。実質オーナー。
- 3 **「中村屋サロン」** 新進芸術家が集う新たな文化空間を現出、文化史に大きな足跡を残す。その発端が穂高時代の相馬夫妻から関わる「東洋のロダン」荻原碌山の中村屋出入りである。
- 4 **「売る側も買う側も共に幸せになれる商売」** 相馬愛蔵が商標に込めた思い。正価販売。



図録『相馬愛蔵・黒光のあゆみ』
(昭和 43 年 株式会社中村屋) より



商業ビルに生まれ変わった新宿中村屋の旧本店
(平成 28 年 7 月 8 日撮影)

5 **キリスト教的ヒューマニズム** 「二人(相馬愛蔵・黒光)が結婚したのは明治30年、ときに愛蔵28才、黒光22才であった。二人がこの60年の長期にわたる夫婦生活を有意義に送ることができたのは、夫婦の性格がまったく相違しながら然し、基本になる人生観がキリスト教的ヒューマニズムで一致していたからであった。」(『相馬愛蔵・黒光のあゆみ』<昭和43年 株式会社中村屋>より)

「当時の多くの商店では、主人と奉公人の間は厳然たる隔たりがあった。従って食事なども別で、奉公人たちは粗食に甘んじなければならなかったが、愛蔵夫妻は職人や店員・女中などと一緒に同じ食事をして、奉公人たちを平等に扱った。」(『相馬愛蔵・黒光のあゆみ』)

「国籍のいかんを問わず、信頼を寄せる人々を一人の人として、その生活の全体まで丸ごと受容した(中略) その商法の中にも人間の心が生かされるべく、何百という店員一人ひとりに温かい目が注がれたのである」(『深志人物誌』所収の「相馬愛蔵」より)。

6 **野人** 「全生涯を野人として押し通し、何の位階勲等もなかった相馬夫妻の生き方が、いつまでも心ある人々の脳裡を去らないのは、二人がよかれあしかれ常に正義人道と日本の近代化を念頭におき、ことにあたってその全力を尽くしたからである。 / 夫妻が畏敬した内村鑑三は明治24年、箱根芦ノ湖の湖畔の夏期講習会で有名な「後世への最大遺物」と題する講演をした。 / 内村はその講演のむすびとして「われわれは後世にのこすものは何もなくとも、あの人はまじめな生涯を送った人であるといわれたいものです」と語っているが、相馬夫妻の生き方はこの内村のことばにピタリと合致している。勿論夫妻は神でもなければ仏でもなく、ただの凡夫凡婦であった。(中略) われわれはその生き方のなかから多くの学ぶべきものがあることを堅く信じてうたがわない。」(『相馬愛蔵・黒光のあゆみ』)。○この文章で2人を指して「ただの凡夫凡婦」と言い切っているが、『相馬愛蔵・黒光のあゆみ』が昭和43年に株式会社中村屋から刊行されたときの中村屋の代表取締役は孫の相馬雄二で、これは相馬雄二の筆になる。実の祖父祖母のことなのでこのように「謙遜」を以って表現したものである。2人は**野人**なるが故に数々の難局を乗り越えられたし、交友範囲にも本人の実力の錬磨と刻苦勉励の末に大を成した**野人**が多い。

Ⅱ 年譜と記録でたどる相馬夫妻の生涯 (年譜は『相馬愛蔵・黒光著作集』全5巻<郷土出版社>)、『南安曇郡誌』第三巻下、『深志人物誌』の3書掲載の記事、年譜を基に編集した)

1 相馬愛蔵の独身時代 【明治期】



安曇野市穂高白金にある生家相馬家の洋館
(平成26年9月11日撮影)

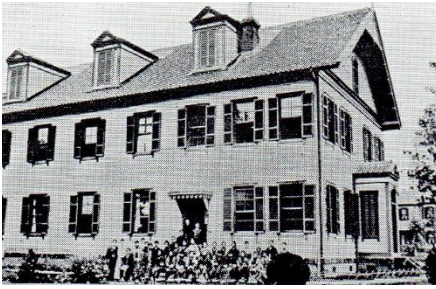


研成義塾草創期の禁酒会メンバー(後列左端荻原守衛
その右が相馬愛蔵。『相馬愛蔵・黒光のあゆみ』より)

〔年代(西暦) 事項〕

- 明治3年(1870) 10月相馬愛蔵、安曇郡白金村(明治7年東穂高村白金)に豪農相馬安兵衛・ちか夫妻の三男として生まれる。その後明治4年に父を、明治9年に母を亡くし長兄が親代りになる。
- 明治11年(1878) 東穂高村矢原の研成学校入学、数学教師成瀬四男也の薫陶を受ける。
- 明治17年(1884) 9月長野県中学校松本支校(のち松本中学校、現松本深志高校)に入学。このとき成瀬四男也が赴任。同級に井口喜源治、上級に木下尚江(のち小説家、社会運動家)がおり親交をむすんだ。愛蔵は数学が抜群にできたが、英語が不得意だった。
- 明治20年(1887) 英語で進級不可となり中学校(この年、長野県尋常中学校に改称)退学。上京し東京専門学校(今日の早稲田大学)邦語政治科に入学(10月か)。既に前年中学の先輩木下尚江が入学していた影響か。2人は生涯の友となる。在校生に津田左右吉、宮崎湖処子がいた。同年、宮崎湖処子らと市ヶ谷教会に通い受洗。
- 明治23年(1890) 東京専門学校邦語政治科卒業。給料取りは合わないと新天地に仕事を求めて北海道に渡り、同地の禁酒運動家伊藤一隆らと交遊する。
- 明治24年(1891) 北海道から郷里に戻り長兄安兵衛の相続人となる(準養子に決定)。養蚕業に従事。養蚕・蚕種の研究を深める。12月東穂高禁酒会を創立。愛蔵が東京で高等教育を受けたということで新知識を吸収しようと青年たちが自ら集まった。創立時は11人、中に望月幸一(愛蔵が中村屋創業時、資金を融通)がいた(2年後に井口喜源治が入会、3年後に荻原守衛が入会)。
- 明治26年(1893) 那須野の孤児院に自家製造の蚕種を寄贈して喜ばれる。
- 明治27年(1894) 2月研究成果の『蚕種製造論』を田口卯吉の経済雑誌社から刊行。那須野の孤児院救済義援金募集に仙台教会を訪れたことがきっかけとなり押川方義(星良<のちの黒光>に受洗)、島貫兵太夫と親交を結んだ。東穂高禁酒会の会員と芸妓置屋設置反対運動を展開し、3月非芸妓設置請願書を豊科警察署と長野県知事に提出。4月豊科村新田の高山寺で開催の第4回南安曇連合青年会集会で売春問題について木下尚江と演説。11月東穂高禁酒会に荻原守衛が入会、有力会員となる。
- 明治28年(1895) 東穂高禁酒会でしばしば演説や談話を行う(上京の年まで)。2月南安曇郡高家村(現安曇野市豊科高家)の高家村研究会で木下尚江と演説を行う。

【記録】「私は早稲田に入ると、その十七歳の夏頃から友人に誘われて、牛込市ヶ谷の牛込教会に通うようになった。(中略) 日曜日の午前十時から礼拝説教、それから級友らとパンの昼食を済まし、また午後の種々の集まりに出席するのであったが、ここでは年長者は父母の如く、あるいは兄姉の如く、若き者は弟妹の如くで実に和気藹藹たるものがあつた。私は宮崎湖処子、金子馬治、野々村戒三等の早稲田派は申すまでもないが、矢島楫子女史、大関和子、三谷民子女史とも相識り、また基督教界の元老押川方義、植村正久、内村鑑三、松村介石、本田庸一、小崎弘道、服部綾雄等の諸先生にも教えを受ける機会を得た。その他島田三郎、巖本善治、津田仙、山室軍平、また島田三郎氏からの縁で田口卯吉氏に接することを得たのもこの教えに連なった幸いというべきであろう。しかしまた当然の結果として、財界政界の方面には一人の友人をも持つことができなかった」(相馬愛蔵『一商人として』)



宮城女学校



「赤い風車の学校」フェリス女学校



明治女学校

(3枚とも『相馬愛蔵・黒光のあゆみ』<昭和43年 株式会社中村屋>所収)

〔年代(西暦) 事項〕

- 明治8年(1875)9月宮城県仙台(明治22年市制)で星喜四郎・己之治夫妻の三女として生まれる。始め菱といったが、良に直す。
- 明治16年(1883)仙台片平丁尋常小学校に入学。
- 明治19年(1886)同校卒業し裁縫学校に入学。
- 明治20年(1887)東二番丁高等小学校に入学。仙台神学校の日曜学校で島貫兵太夫から読書の指導を受ける。
- 明治22年(1889)仙台教会の牧師押川方義から受洗。
- 明治23年(1890)東二番丁高等小学校を卒業する。この頃、布施淡と交際し始める。
- 明治24年(1891)宮城女学校に入学する。
- 明治25年(1892)2月先輩の斎藤冬たちのストライキ騒動に殉じる形で同校退学。押川方義の世話で横浜にあるフェリス女学校に転入学する。
- 明治26年(1893)秋ごろ、鎌倉の笹目ヶ谷に住む『文学界』の主宰者星野天知を訪ね、文学上の指導を受ける。
- 明治28年(1895)秋、星野天知の労により巖本善治が校長を務める明治女学校に転入学し、島崎藤村、青柳優美から英語を教わる。巖本善治からはのちに良の「才鋒」を戒め、『女学雑誌』に寄せた良の作品の筆者名を「黒光」(光を包むの意)として掲載、以後「良」は家族内だけの呼び名となる(『南安曇郡誌』第三巻下による)。島貫兵太夫(良を妹のように可愛がってくれ、「アンビシャス・ガール」と呼んだ)が相馬愛蔵を良の将来の結婚相手として紹介する。11月に従妹佐々城信子が国木田独歩と結婚。
- 明治29年(1896)中傷記事が新聞に載ったことや親友の加藤豊世が布施淡と婚約したことで精神的な痛手を受ける。相馬愛蔵が中傷記事に動揺せず自分を理解し信頼してくれたことに感激、相馬愛蔵との結婚を本気で考えるようになる。国木田夫妻破綻。
- 明治30年(1897)3月明治女学校を卒業。

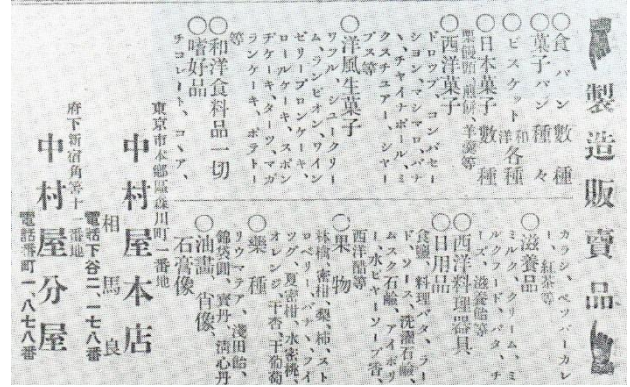
【記録】「ちょうどそういう時(註 ニコライ堂に通うようになった頃)に、私に結婚の話がありました。それはほかならぬ島貫兵太夫氏のご配慮でありました。(中略)私の成長に従って島貫さんの考えてくださることも実際問題に入り『結婚は私にまかせておけ、私がきっといい配偶(者)を見つけてやる』と早くから言われておりました。それがいよいよ実現されたわけで『信濃のだいぶ奥の方だが相馬愛蔵という人がある。(中略)その地方で禁酒運動をやったり、養蚕に関する著書をしたりしていて頼もしい青年だ、あなたとはよく合うと思う』というお話でした。」(相馬黒光『黙移』)

3 相馬愛蔵・黒光(本名:良)夫妻のあゆみ 【明治30年代、40年代】



碓山を囲び集まった芸術家たち

(『相馬愛蔵・黒光のあゆみ』<昭和43年>所収)



明治末年の中村屋の販売品目

(『相馬愛蔵・黒光著作集』第2巻<昭和56 郷土出版社刊>所収)

[年代(西暦) 事項]

- 明治30年(1897)3月相馬愛蔵・良、東京牛込の日本キリスト教会で結婚式を挙げる。中傷記事の件もあり、作家の夢を断念した相馬黒光(良)は結婚の心境を「私はあの独歩に教えられたワーズワースの詩を思い、私のあくがるもの、求めてやまないものは都会を離れた遠き田園にあるのではないか、ああ私も塵を払ってその田園に隠れよう。いまは、もう心を虚しうして世の慣わしに従い、人の妻になろう」(相馬黒光『黙移』)と述べている。2人は上田から保福寺峠を越え、東穂高村白金の相馬家に入った。
- 明治31年(1898)11月愛蔵、井口喜源治のために研成義塾創立に協力する。
- 明治32年(1899)良に影響を受けた荻原守衛が美術家を目指し上京、良の母校明治女学校の巖本善治の許しを得て敷地内に画室深山軒を建て、不同舎に通って絵を学ぶ。
- 明治33年(1900)1月良の作品「夜叉鑑」が巖本善治命名の「黒光」の筆名で『女学雑誌』504号に掲載される。3月愛蔵、『秋蚕飼育法』を蚕業新報社から刊行。
- 明治34年(1901)1月愛蔵、研成義塾校舎の落成式に出席。3月黒光の初恋の人というべき布施淡没。5月黒光の叔母佐々城豊寿没。9月愛蔵・黒光夫妻、生活一新のため上京、本郷団子坂の借家に仮寓。12月東京帝大前の中村屋を居抜きで譲り受け、パン屋を開業(購入資金700円は友人望月幸一から借金、当座の営業資金は子供の教育貯金を充当)。

【記録】「良は、彼女がその著『黙移』の中で言っている通り、押川先生の教え子であり、先生の高弟島貫兵太夫氏は兄弟子に当り、幼年時代からその懇切な指導を受けたものであった。すなわち押川先生と島貫氏の媒酌で、明治三十年、私の許に嫁いで来たのである。(中略) 良は最初田園の生活をよろこび、私の蚕種製造の仕事にもよき助手として働くことを惜しなかったが、都会で受けた教養と、全身全霊を打ち込まねば止まぬ性格と、それには周囲があまりに相違した。その中で長女俊子が生れ、次いで長男安雄が生まれた。するとまたその子供の教育が心配されて来る。良はとうとう病気になったので、私は両親に願って妻の病氣療養のため上京の途についた。俊子は両親の許に残し、乳飲子の安雄をつれ、喘息で困難な妻を心配しながら、徒歩で十里の山道を越えて上田に向かった。時は明治三十四年九月のことである。/ 東京に着くと妻は活気を取り戻し、病氣も拭われたように癒えた。この上京を機会として我々は東京永住の覚悟を定め、郷里の仕送りを仰がずに最初から独立独歩、全く新たに生活を築くことを誓い、勤めぎらいな私であるから、では商売をしようということになったのである。」

(相馬愛蔵『一商人として』)

- 明治 35 年(1902)黒光、従妹佐々城信子と国木田独歩との間の子浦子を預かり 1 年養育する。愛蔵、夏期 3 ヶ月は帰郷して養蚕・蚕種業に従事(明治末年まで)。
- 明治 37 年(1904)中村屋、新製品クリームパンとクリームワッフルを売り出す。次女千香生まれる。
- 明治 39 年(1906)1 月次男襄二(荻原守衛の油彩画「病める児」のモデル)生まれる。
- 明治 40 年(1907)5 月三男雄三郎生まれるも 10 月に早世。12 月新宿追分に中村屋支店開設。
- 明治 41 年(1908)3 月荻原守衛、ヨーロッパから帰国し新宿角筈にアトリエを建て、中村屋に通う。
- 明治 42 年(1909)中村屋、店舗拡張のため新宿の現在地に移転。このころから荻原守衛(碌山)を中心に中村彝、中原悌二郎、戸張孤雁らが中村屋に出入りするようになり急速に中村屋のサロンが形成されて芸術的雰囲気が漂い出す。7 月四男文雄生まれる。
- 明治 43 年(1910)3 月次男襄二没。4 月 22 日荻原守衛(碌山)没。9 月三女睦生まれる。
- 明治 44 年(1911)黒光、春から病気となり一時重態となる。12 月五男虎雄生まれる。
- 明治 45 年/大正元年(1912)相馬夫妻、木下尚江(小説家、社会主義者、愛蔵の中学と早稲田の先輩にして親友)の紹介で岡田虎二郎を知り静坐法を始める。

4 相馬愛蔵・黒光(本名:良)夫妻のあゆみ 【大正期】



合奏するエロシェンコと黒光

(石川拓治『新宿ベル・エポック』所収)



大震災を記念して地震パンを販売する中村屋 (大正末年頃)

(同左)

[年代(西暦) 事項]

- 大正 2 年(1913)黒光、早稲田大学の教授たちとロシア語、ロシア文学の研究を始める。
- 大正 3 年(1914)11 月四女てつ生まれる。てつの名付け親は中村彝。
- 大正 4 年(1915)12 月 2 日相馬夫妻、日本に亡命したインド独立運動の首領ラス・ビハリ・ボースを匿(かくま)い保護。12 月 15 日四女てつ没。
- 大正 7 年(1918)7 月長女俊子、ラス・ビハリ・ボースと結婚する(俊子は英語に堪能)。
- 大正 8 年(1919)朝鮮独立運動の志士林圭、ロシアの盲目の詩人エロシェンコ、漂白のロシア人ニンツァが中村屋に身を寄せる(黒光はロシア語を話せた)。安雄の恩師会津八一と相馬夫妻との親交が始まる。この年黒光、中村屋サロン脚本朗読会を始め、秋田雨雀を中心に女優水谷八重子、夏川静江らがメンバーとなる。これは黒光が常々文学作品や脚本をエロシェンコに読み聞かせ喜んでもらえたことが動機になっている。

- 大正 9 年(1920)ボース・俊子夫妻に長男正秀生まれる。
- 大正 10 年(1921)エロシェンコにボルシェビキの疑いで退去命令が出、逮捕のために淀橋署の警官乱入。相馬夫妻、この件を人権蹂躪として告訴し、淀橋署長が引責辞任するに至る。結果的にエロシェンコは国外退去処分となる。
- 大正 11 年(1922)インドの詩人タゴール(1861～1941. ベンガル文学最大の詩人. 英訳出版した詩集『ギータンジャリ』でノーベル文学賞受賞. インド内ではマハトマ・ガンジーとともにインド独立運動の精神的支柱とされた)が日本を訪れ、相馬夫妻及びボースと会見し、日本とインドの親善を約束する。12 月ボース・俊子夫妻に長女哲子生まれる。
- 大正 12 年(1923) 4 月中村屋を株式会社にする。7 月ボース、日本に帰化。9 月 1 日関東大震災。この年、私邸の土蔵を改造、脚本朗読会を発展させ秋田雨雀らの先駆座を開設。
- 大正 14 年(1925)3 月俊子没。これを機に相馬夫妻、仏教(浄土宗)に帰依し高僧渡辺海旭師に師事する。同月長男安雄、早稲田大学政治科を卒業。この年、三越百貨店が新宿に進出してきて新宿の商店に打撃を与えるようになったため、中村屋も百貨店対策として経営の多角化に乗り出すことになる。
- 大正 15 年(1926)秋に相馬夫妻、中国旅行をして月餅を知る(中村屋月餅の始まり)。

【記録】「三越が新宿に進出し、現在の二幸のところに支店を開いたのは大正十五年十月であった。まだその頃の新宿は新開の発展地とはいえ、これといって目に立つほどの商店もなかったから、三越支店の出現が、新宿一帯の地に与えた刺激は大きかった。地元の商店でも多少ともその打撃を受けないものはなかったが、中村屋(当時売上げ月二万円程度)でも、月額千円に上った商品切手が全く出なくなり、その他の売上げにおいておよそ二千円を減じ、合わせて三千円の激減を見た。これらの客はすべて三越に吸収されたものであった。/ 私は考えた。鳥なき里の蝙蝠という譬えがあるが、三越という大きな鳥が出現して中村屋がただちにこの打撃を被るのは、やはり中村屋の商売にまだ一人前として足らぬところがあるからである。これは大いに反省し環境に従って一段の飛躍を遂げるのでなかったら、せっかく独自の位置を築いて来た中村屋が今後百貨店のおこぼれを頂戴する悲運に陥らぬとも限らぬ。これは一刻も猶予がならぬ、奮起するのはこの時であると。/ 私はこの難関突破の決意をもって、翌昭和二年一月、幹部会を開いた。ところが幹部めいめいの感ずるところもほとんど同じであって、誰一人弱音を吐くものはない。(中略)私も胸中を打ち明け、一同に対策を諮ったところ、店員側は何よりもまず閉店時間を、これまでより二時間延長し、日曜日でも平日の時間通り営業することを希望した。(中略)日曜大祭日は五時閉店のきまりであった。夏の夕の五時以後は盛り場の新宿のことで、優に半日分以上の売上げがある。(中略)次に、各工場の職長に日本一の技術者を招聘したいという私のかねての宿望を実現することになり、二月初旬には日本菓子部に荒井公平、洋菓子部に高相鉄蔵、食パン部に石崎元次郎の三君の入店を見ることが出来た。喫茶部の開設を決定したのもこの時である。(中略)これならば恐るるに足らぬという自信をもつことができたのである。店員一同の奮闘もまためざましかった。果たして形勢幾許もなくして回復し、その後売上げは急激な勢いをもって増大した。」(相馬愛蔵『一商人として』)

5 相馬愛蔵・黒光(本名:良)夫妻のあゆみ 【昭和期戦前・戦中】

【昭和戦前】(昭和元年～昭和15年)



昭和8年の新宿駅前通り



昭和10年頃の新宿中村屋(「懐かしめる」「ロシヤパン」の文字が見える)

(『大東京写真案内』<昭8 博文館>所収)

(『相馬愛蔵・黒光著作集』第4巻<昭和56年 郷土出版社刊>所収)

【記録】中村屋が戦前の全盛期を迎えた頃(昭和初頭～10年頃)の新宿と中村屋の様子を宮嶋資夫は「四谷 赤坂」(『大東京繁昌記 山手篇』<昭和3年 東京日日新聞社>)の「エロシエンコ」にこう記す。「見附と相對して、新宿駅付近が今日の四谷区の西端となっているが、誰が今日の盛観を、予想した人があるだろうか。(中略) 今日では布袋屋、三越の建物が素晴らしい勢いで聳えている。小さな建物は片っ端から壊される。そのあとには、段々高い建物が建って行く。武蔵屋、三越が近くまた、一層どえらい奴を建てる計画になっているそうである。何とか座という芝居も出来るし、武蔵野館は踏み切り向うに引越しても、なお圧倒的封切によって、シネマ・ファンを吸収するに違いない。中村屋の店頭にはいつも暮の売出しのように人がたかっている。売れ高、東京随一の実利的名声は、遂に黒光女史の名声までを圧してしまった。それにしてもあの裏の洋館はどうなったか。ワシリー・エロシエンコがさびしそうにぼつねんと住んでいた。国木田独歩の娘さんもここにいた。中村彝の絵も可なりあるという話だ。愛嬌者の新島栄治※がにやにや笑って菓子を包んでいたこともある。私たちには東京随一とならなくとも、忘れ難い店である。(中略) 浅草も銀座も上野もいらない。あらゆる需要を一手に供給しようという、一大デパートメントストアを形造るような町の状勢、これが今日の新宿である。(中略) 誠に大東京の繁昌を最も顕著に物語っている場所となった。」今「布袋屋」の建物は「伊勢丹」の建物の一部。

※(註)「新島栄治(1889～1979) 大正時代の詩人 群馬県山田郡矢場川村(現太田市)生れ。幼年期から放浪生活を送り、1907(明治40)年に上京した後も居所定まらぬまま、さまざまな職を転々とした。22年4月「ブルジョア文芸の撲滅」を掲げるアナーキズム系の雑誌「シムーン」(次号より「熱風」に改題)に参加。「種蒔く人」や「新興文学」「文芸戦線」等にも労働現場の体験に基づく詩や貧困生活の実相をえぐった詩を寄稿した。自ら「純プロレタリアート」と言挙げした詩集『湿地の詩』(23.5 紅玉堂書店)を刊行。ほかに詩集『隣人』(24.6 同前)、『三匹の狼』(70.8 木犀書房)がある」(『現代詩大事典』<三省堂>)

〔年代(西暦) 事項〕

- 昭和2年(1927)6月中村屋、ボースのレシピを採り入れた純インド式カレーライスやロシア式スープなどをメニューにした喫茶部を開設。一方、日本菓子、洋菓子、食パンも一流の技術者を招き、新製品を売り出す(月餅、中華まん登場)。四男文雄、ブラジルに渡航。
- 昭和3年(1928)この年、三越対策が功を奏し売上げ、三越進出の頃の2倍にも達する。「三越の新宿進出は中村屋を一人前に育ててくれたものとして感謝」(『一商人として』)3月～7月愛蔵、ヨーロッパ視察(目的:百貨店研究と北欧の酪農畜産視察のため)。
- 昭和4年(1929)この年ヨーロッパ視察の成果を生かし喫茶部を刷新。11月四男文雄没。
- 昭和5年(1930)五男虎雄、早稲田高等学院を退学し家出、非合法運動従事(翌年帰宅)。
- 昭和7年(1932)この年中村屋の喫茶部のメニューに中国料理を加える。4月虎雄、上智大学予科に入学したが再び非合法運動に従事し、市ヶ谷未決監に収監(9年帰宅許可)。
- 昭和9年(1934)黒光口述、島本久恵筆記で「黙移」が「婦人の友」に連載される。
- 昭和10年(1935)4月五男虎雄、昭和医専に入学。この年、仏教学者矢吹慶輝博士を囲む会を始める。矢吹慶輝は文学博士、敦煌出土の仏典を研究し大正14年に「三階教之研究」で日本学士院恩賜賞を受賞している。
- 昭和11年(1936)6月黒光の代表的著作となる『黙移』が女性時代社から刊行される。
- 昭和12年(1937)中村屋、店員の修養のために研成学院(名称は井口喜源治の「研成義塾」にちなむ)を開設(初代校長矢吹慶輝、第二代校長田中穂積<第四代早稲田大学総長、法学博士>)。この学院も愛蔵のヨーロッパ視察の成果でデンマークの国民高等学校(グルンドウィヒ考案)に範、「職業には直接関係のない、国の歴史とか宗教とか、主として人間を高尚にする学問を教える」(『一商人として』)施設とした。11月親友木下尚江没。
- 昭和13年(1938)7月親友井口喜源治没。愛蔵は病臥の喜源治を春秋見舞っていたが葬儀の弔辞で彼の不遇な生涯は「自分がキリスト教と禁酒主義を故郷へ移入したによる」と悼む(臼井吉見『安曇野』第四部)。同月愛蔵著『一商人として』が岩波書店から刊行。
- 昭和14年(1939)11月黒光、『広瀬川の畔』を女性時代社から刊行する。この年中村屋の株式を一般公開する(岩波茂雄らが新株主になる)。
- 昭和15年(1940)8月黒光、尿毒症にかかり重態、一時危篤になった。

【昭和戦中】(昭和16年～昭和20年8月15日)

〔年代(西暦) 事項〕

- 昭和17年(1942)この年、ラス・ビハリ・ボース、インドの国民党総統に就任する。3月ボースの長男正秀、早稲田大学政治科を卒業したが、10月には習志野戦車部隊へ入隊。
- 昭和18年(1943)この年、ラス・ビハリ・ボースの後継者となったチャンドラ・ボースがインドの仮政府を結成する。4月五男虎雄、軍医として出征する。
- 昭和19年(1944)1月長男安雄、海軍指定工場の航空食工業株式会社を設立。3月黒光、『穂高高原』を女性時代社から刊行する。
- 昭和20年(1945)1月ラス・ビハリ・ボース没。3月相馬夫妻、五日市の大悲願寺に疎開する。5月25日空襲のため中村屋の店舗、工場、宿舎、相馬夫妻の私邸などが全焼。6月ボースの長男正秀が沖縄で戦死する。8月15日の戦争終結の直後に長男安雄、自分が経営する航空食工業株式会社を解散し多摩川食品株式会社を設立。

6 相馬愛蔵・黒光(本名:良)夫妻晩年のあゆみ 【昭和期戦後】



穂高東中学校(旧穂高中)の「坑夫」
(平成 27 年 6 月 7 日撮影)



荻原碌山「坑夫」の台座裏の銘板に相馬黒光最晩年の言葉
(平成 27 年 6 月 7 日撮影)

坑夫は明治四十年荻原守衛が
滞佛中の作品で我國に近代彫
刻の道を拓いた不滅の傑作で
ある。
この度作者の郷里に学舎が設
けられたのを祝つて遺族荻
原家が原作を提供し学校が之
を銅像として建てたのはその雄
渾と精神を以て深く子弟を薰
育し郷土の宝として永久にこ
の作を伝えん爲であつて誠に
よろこばしい事である

昭和廿九年四月
相馬黒光

台座裏銘板読み下し

〔年代(西暦) 事項〕

- ❑昭和 21 年(1946)6 月相馬夫妻、大悲願寺から三鷹の中村屋牧場跡に移る。この年中村の焼け跡を無断占拠していた尾津組相手に退去の訴訟を起こす。
- ❑昭和 22 年(1947) この年尾津組問題が解決。株式会社中村屋と多摩川食品株式会社を合併し新会社の社長に長男安雄、会長に愛蔵が就任。
- ❑昭和 23 年(1948)4 月 22 日中村屋、復興工事竣工し売店と喫茶部の営業を再開する。
- ❑昭和 26 年(1951)9 月中村屋笹塚工場(東京)開設。この年から相馬夫妻、千一クラブ運動を進め、私財を全て投入、老人ホーム建設を目指す。
- ❑昭和 29 年(1954)2 月 14 日相馬愛蔵没、享年 85 歳(数え年)。12 月黒光、「碌山を偲ぶ会」に出席する。
- ❑昭和 30 年(1955)3 月 2 日相馬黒光没、享年 81 歳(数え年)。秋、千一クラブの成果が実り、東京杉並に有料老人ホーム「黒光ホーム」が開所する。